

## ヴァルターのminneを考える(2) : 「少女のリート」を中心にして

著者	赤井 慧爾
雑誌名	研究論集
巻	72
ページ	35-49
発行年	2000-08
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006377">http://doi.org/10.18956/00006377</a>

## ヴァルターの *minne* を考える (2)

—「少女のリート」を中心にして—

赤井 慧 爾

### はじめに

ドイツ中世の巨匠ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデは、ヨーロッパの伝統を踏まえながらも、常に時代を先取りし、美しい中世高地ドイツ語を駆使して、人間の愛と生を、ドイツの社会と政治を歌ってきた。その歌の数は、ほぼ60編のミンネリートを含んで90編に及ぶが、その一字一句の詳細な検討を、これまでの一連のヴァルター論文で続けてきた。ここでは、前稿(1)の考察に引き続いて、「少女のリート」という表題でまとめられている10編のリートを取り上げる。これらのリートは、大抵は1205年以後の創作とされているが、この研究論集に掲載した論文ではまだ十分に検討していないので、従来のように形式と内容の両面から考察し、人間の愛と生を高らかに歌い上げた詩人の真実の姿をさらに深く捉え、ヴァルターの *minne* 研究のまとめとしたい<sup>1)</sup>。

ところでヴァルターは、ドイツ中世最高の恋愛歌人 *Minnesänger* であり、また格言詩人 *Spruchdichter* としても高く評価されているが、さらに歌唱詩句抒情詩 *Sangverslyrik* と歌唱格言詩 *Sangspruchdichtung* という二つのジャンルに新しい表現の可能性を開き、これにまた、「晩年の調べ」*Alterston* (L.66,21) あるいは「悲歌」*Elegie* (L.124,1) のような新しい形式を付加して、詩人独自の境地を歌い上げている。

ヴァルターの恋愛歌は、*Minnesang* の伝統に対して、これを重視しつつも、積極的に批判し、新しい時代を先取りする。この時代には中世の世界も変わりつつあり、男女の愛も奉仕から自由へと展開していく。目上で既婚の貴婦人への騎士の奉仕の愛も、目下の少女への平等の愛へと進み、身分にも性別にも差はなく、相思相愛が強調される。愛が美を作るのであり、富も名誉も愛には叶わない。愛こそが人生の唯一の真実である。

「少女のリート」の検討に入る前に、次の3編のリートを考察したい。これらのリートはヴ

ヴァルターの創作としては異論が出されているが、ドイツ中世恋愛歌の本来の姿を伝え、ヴァルターの初期の作品とも考えられるからである<sup>2)</sup>。

「繰り返された求婚」(L.120, 16; M.F.214, 34{A1 Hartmann; C42 Hartmann; E121 Walter})では、婦人への奉仕を願って、最善を尽くそうとしている騎士が、好意を期待しているのに対し、婦人はその騎士にほとんど逢っていないことを理由に断る。騎士の方では、婦人が最初の歌を受け入れてくれたので、婦人の虜になり、離れられなくなっている。騎士は婦人に奴隷のように仕え、その苦しみは婦人によってしか癒されず、償われないものだから配慮して欲しい、と願う。愛には名誉が備わり、節操や至福も伴っている。不正な行いをする人があれば、愛は悲しむものである。

「ミンネの賞賛」(L.91, 17; C65)では、男性が女性を心から愛するならば、たとえ女性からの報いがなくとも、男性の心は優しくなり、それが周囲の人々の気持ちを和ませる、と歌われる。幸運にも女性の心が優しく、男性の愛に答えてくれると、男性の喜びは大きなものとなる。世の中の幸福はこの愛から始まる。愛することは個人的な好意であるが、それが社会に与える影響は大きい。ヴァルターの愛は相思相愛を理想とするが、その根源はこの愛する思いにある。愛には喜びと苦しみとが内在しており、愛するとはそもそも苦しむことであるから、男性は女性から拒否されて苦しみながらも、この愛を求め続ける。そこに大きな喜びがある。愛を避けては人生の喜びはない。

「知らせ」(L.112, 35; C386)では、女性が男性に喜びを与えるならば、多くの人々が喜ぶ、と歌われる。男性に気高い心向けると、喜びで心が安らぐ人はみんなそこから利益を得る。このように女性が男性に喜びを与えると、男性には女性の誉れと値打ちを歌う心づもりができる。

これらのリートで歌われているのは、男女の愛がお互いを喜ばせ、お互いにいたわり合うもので、それが周りの人々にも安らぎを与える。男女の愛の本来の姿は、単に男女間の愛に留まらず、周りの人々の心を和ませるものである。このような営みは、人間が生きていく上で非常に重要なものである。

ヴァルターのミンネは、すでに述べたように、中世の伝統的な *minne* (目上で既婚の女性への愛) から、本来の愛である個別的な *liebe* (一般の女性への平等の愛) へと変化していく。本稿ではこの過程を、まずヴァルターのミンネ観から探り、その思考が詩人の強靱な自己意識の中で大きな展開を見せている「少女のリート」の検討を通して解明しようと思う。ヴァルターの華やかな恋愛歌のうちで、このリートにこそ、ヴァルターがドイツ中世文学、とくに恋愛歌の巨匠と評価される真の意味があり、その醍醐味が漲っている。

すでに見てきたように、喜びを中心とした初期のリートでヴァルターは、ミンネがないと心は真に楽しくはならない、男性の喜びや苦しみはすべて女性次第である、と歌う。新しいミン

ネについて歌った中期のリートでは、愛らしさが美しさを決め、美しい女性を創る、と歌う。男性にとっては女性が、そしてその愛がすべてであり、これがあらゆる営みの基になり、喜びと苦しみの根源である。生きていることの喜びはすべてこの愛から出る。ここで扱う「少女のリート」ではさらに、この愛は平等であり、当事者二人の間でのみ成立する、と歌う。

ヴァルターの恋愛観の中心概念は従って、前論文ですでに述べたように、1. すべての喜びも苦しみも愛から始まる、愛がなければ何事も起こらない、2. 愛は美を創るが、美は愛を創らない、3. 愛は平等であり、愛に上下の区別はない、4. 愛は終わりも始まりも誰にも予測できない、5. 愛は二人の間でのみ完成される、とまとめられる。

「少女のリート」としては、次の10編のリートが残されているので、ここではこれを従来のようにまづ一字一句を検討の対象として取り上げ、それぞれ和訳と解説を通して、ヴァルターの考える愛の諸相を、形式と内容の両面から具体的に考察しよう

1. Erste Begegnung (L.110, 13) 最初の出逢い
2. Schönheit und Liebreiz (L.49, 25) 美しさと愛らしさ
3. Rechte Liebe (L.50, 19) 本当の愛
4. Halmorakel (L.65, 33) 麦藁のお告げ
5. Traumliebe (L.74, 20) 夢の愛
6. Frauenschönheit (L.53, 25) 女性の美しさ
7. Traumglück (L.94, 11) 夢の幸福
8. Unter der Linde (L.39, 11) 菩提樹の下で
9. Vokalspiel (L.75, 25) 声の遊び
10. Mißstimmung (L.110, 27) 不機嫌

1. 最初の出逢い (L.110, 13)

1 わたしがあの人と知り合ったあの時に幸いあれ、彼女がその気高さでわたしの思いを奪って、わたしが彼女をひたすら思うようにして以来、その時は、わたしの命と心を征服したのです。わたしが彼女から離れることができないようにしたのは、彼女の美しさと気高さとそしてあんなに優しく笑う彼女の赤い口です。

2 わたしは心と思いを、とても純粋な人、愛しい人、気高い人に向けました。わたしが求める彼女の慈愛が、わたしたち二人に良い実りとなりますように。わたしがこの世で得た喜びのすべては、彼女の美しさと気高さとそしてやさしく笑う彼女の赤い口のおかげです。

(解説) 恋人の美しさ、気品の高さ、純粋さ、愛らしさ、慈愛の豊かさなどを讃える。リズムは弱音で始まる 5a, 4b, 5a, 4b, 5+, 4 c, 4c である。

第1節では、彼女と知り合いになったその時が讃えられる。それ以来彼女の虜になり、命も

心も彼女のものになり、彼女の美、気品、笑いによって彼女から離れられなくなった様子を歌う。

第2節では、彼女との愛の完成が望まれる。彼女は純粋で、愛らしく、気品があって、その上に慈愛に満ちているので、わたしの喜びのすべてが、彼女の下にあることを歌う。

## 2. 美しさと愛らしさ (L.49, 25)

1 心から愛する娘よ、神様があなたに今日もそしていつも、良いものを与えて下さいますように。わたしがあなたへの思いをもっとうまく言い表せることができるなら、心からそうしてあげたいのですが。あなたに言えるのはただ、あなたをもっと愛している者はだれもいないということだけです。ああ、これがわたしにはとても辛いのです。

2 あの人は、わたしがこんな風に身分の低い者に向かってわたしの歌を歌っていることを、わたしに対して非難しています。愛とは何かがわからないとは、のろわしいことです。愛に出会ったことのない人が、愛するのに豊かさや美しさを欲しがります。ああ、何という恋をするのでしょうか。

3 美しさにはしばしば意地悪な心が潜んでいます。そんな美しさにはだれも急いで近づかないことです。愛は心にもっと好ましい働きをします。この愛の後に美しさが来るのです。愛は女性を美しくします。これは美しさにはできません。美しさは人を決して愛らしくはしません。

4 わたしは我慢しています、我慢してきましたし、これからも我慢していきます。あなたは美しい方です、それだけで十分です。このことであの人はわたしに何を言えるのでしょうか。あの人が何と言おうと、私はあなたが好きです。だからわたしは女王様の金の指輪よりあなたのガラスの指輪の方を選びます。

5 あなたが誠実さと変わらぬ心を持っていて下されば、いつか心の苦しみがあなたの側からわたしに与えられても、気にはしません。しかしこの二つのうちのどちらもあなたが持っていなければ、あなたは決してわたしのものになってはいけません。ああ、もしもそんなことになったら。

(解説) ヴェルターはここで人間の愛の真実を歌う。私は誰よりも彼女を愛している、愛には富も美もいらぬ、これに誠と不変があれば、愛は成就される。リズムは強音で始まる4a, 4b, 4a, 4b, 4c, 8cである。

第1節では、愛の究極の境地が伝えられる。もし心から愛する人ができたら、彼女にいつも良いものを与えることを、まず神に祈る。しかし彼女にあげるのにもっと良いものがあるれば、自分自身であげたい気持ちを持っている。彼女に言えるのは、だれも自分ほど彼女を愛してはいないということだけである。この観察は鋭い。だれもが感ずる気持ちではあるが、それをすらすらと歌える詩人の心が憎い。最後に詩人は、これは辛いことである、と結ぶ。女を

愛する詩人には心の安らぐ暇がない。次の詩節で分かることだが、詩人の心は不安でいっぱいである。相手の女性は自分よりは身分が低い。この時代では、恋の歌を歌う相手は身分が上の女性が普通である。身分の低い女性に対しては歌わない。詩人が心から愛する相手はしかし身分が下である。身分の上下は愛とは関係がない。階級の相違が大きい社会では、これは大変なことである。詩人の勇気に驚く。

第2節に入ると、人々の非難の声が聞こえてくる。愛とは何かがわかっていない人々の声である。愛はすべてを超える力を持つ。富も美も効果はない。愛に出会うとすべての束縛はなくなる。ただ恋する相手愛するだけである。

第3節になると、詩人はさらに愛の深さを探る。美には意地悪さが潜んでいる。上辺だけの愛は本来の愛ではない。美に惑わされて急に近づくと、ひどい目に遭う。愛は心の問題で、心を豊かにする。この愛に美はととも及ばない。この愛こそ女性を美しくする。美しさが女性を愛らしくすることはない。愛は美を創るが、美は愛を創らない。

第4節では、詩人は周りの人々の非難を気にしないことが述べられる。愛する女性が美しければ、それだけで十分である。愛の他には何も要らない。

第5節では、さらに誠実さと変わらぬ心とが求められる。これが愛の条件である。この条件が満たされなければ、愛は始まらない。始まってもすぐに消えていく。

現在の愛もこの中世の愛と同じである。男女の愛の本質は永遠に変わらない。ヴェルターの見つめる愛は、真実の愛である。これだけ率直に愛の真実を歌える詩人は少ない。

### 3. 本当の愛 (L.50, 19)

1 あなたがわたしのことを思って下さっているのかどうか、それはわたしにはわかりませんが、わたしはあなたが好きです。一つのことをわたしには辛いのです。あなたはわたしの横を見、上を見て、見過ごしてしまいます。そんなことはしないで下さい。わたしには、このような愛は大きな苦しみなしに耐えることはできません。わたしの支えになって下さい、わたしには荷が重すぎます。

2 あなたの眼がわたしをめったに見ないのは、あなたの用心のせいですか。あなたがそれを良いこととして、なさっていらっしゃるのなら、わたしはそれに対して非難がましいことはありません。そうでしたら顔を避けて下さい。それなら許してあげます。あなたがそれ以上できないのでしたら、わたしの足下を見て下さい。それがあなたの挨拶なのですから。

3 わたしが気に入って当然の女性をみんなしっかりと見ると、あなたこそがわたしの愛する婦人なのです。このことはお世辞でなく言えます。彼女たちはみんな身分も高く、金持ちです。その上に気高い心情も持っています。おそらく彼女たちの方が良いでしょうが、あなたは素晴らしいお人です。

4 貴いお方よ、あなたがわたしのことを少しでも思っているのかどうか、考えてみて下さい。愛する人の一方だけの愛は、そこにもう一方がなければ、良くはありません。愛は片一方だけでは役には立ちません。愛は共通です。共通であれば、愛は二つの心を通して行きます、それ以上を通しては行きません。

(解説) 好ましい女性に出逢ったらいつでも起こりそうな感情を、詩人は率直に歌う。リズムは強音で始まる 3a, 5b, 3a, 5b, 3c, 3c, 4d, 5d である。

第1節では、彼女が好きなのに、彼女は自分に無関心なのが嘆かれる。彼女が私を眼もくれないで見過ごしてしまうが、それは困るのだ。悲しいのだ。荷が重過ぎるのだ。なぜ見てくれないのか。

第2節では、見てくれない理由が考えられる。周りの人々を考慮してのことか。いろいろ考えてそうしているのなら仕方がない。我慢しよう。でも足下ぐらいは見て欲しい。それが挨拶というものではないのか。

第3節では、気に入る女性の中で、愛する人がやはり一番であると歌われる。これが本心である。他の女性たちは身分も高く、お金もあり、気品もあるが、しかし自分の彼女が最高である。

第4節では、彼女の気持ちを知りたいと歌われる。愛は相思相愛でなければ役に立たない。お互いに愛を共有しないと本当の愛ではない。

愛があれば、身分も、お金も、気品も問題ではない。しかしこの愛は一方通行ではいけない。お互いに思い合う相思相愛でなければ、その愛は真実の愛ではない。

#### 4. 麦藁のお告げ(L.65, 33)

1 疑いいっぱい希望で、わたしは座り、慰めがわたしの気分をまた変えない限り、彼女への奉仕を止めようと思いました。これは慰めであるとは本当は言えません、だからああ悲しいこと。それは辛うじて小さな慰めです、小さくて、あなたに言うとすぐに、あなたはわたしを嘲り笑うでしょう。でも理由がわからないのに、だれかが喜ぶことはまれです。

2 麦藁がわたしを喜ばせてくれました。わたしが恵みを見つけるだろう、とその麦藁は言っています。わたしは以前子供たちのところで見てきたように、この小さい麦藁を測りました。さあ、聞いて、注意して下さい、彼女もそうするかを、「する、しない、する、しない、する」。そんな風に測る度に、終わりはいつも良好でした。このことがわたしを慰めてくれます。でもこれには信念が要ります。

3 彼女がどんなに好きでも、いつも人々が彼女に奉仕することに今では十分に耐えることができます、彼女の求めを妬む必要は全くありません。わたしには今はわかっていますが、だれかが彼女を易々とぐらつかせることができるなど、決して信じることはできません。欺かれた

者たちが、欺くのは何かがわかればいいのです。でもほら吹きどもが彼女に会っている間が長すぎるのです。

(解説) 恋人を信じるのが喜びである。リズムは弱音で始まる 4a, 4b, 4a, 4b, 6c, 5d, 5d, 6c である。

第1節では、希望があっても、疑わしいときには奉仕は出来ないことが述べられる。慰めのないところに喜びはない。

第2節では、麦藁遊びを思い出して、彼女の心が測られる。結果はいつも良好で、それがわたしの慰めになる。

第3節では、彼女への信頼が述べられる。彼女の周りに集まるのは最良の人ばかりで、彼女も人を欺くことはない。ほら吹きは信用出来ない。

#### 5. 夢の愛(L.74, 20)

1 「愛しいお方、この花冠を取って下さい。」そのようにわたしは美しい少女に言った。「そうして美しい花を髪にかざせば、あなたは踊りを飾るでしょう。わたしが宝石を持っていれば、あなたの頭を飾るのですが、もしわたしがそうするとあなたが信じて下さるなら、の話ですが、わたしがそう思っているこの誠の心を見て下さい。」

2 彼女は、名誉を持つ子供のように、わたしの捧げ物を受け取った。彼女の頬は、百合の側に咲く薔薇のように、赤くなった。その時明るい目は恥じらいを見せた。しかし彼女は美しいお辞儀をしてくれた。これがわたしには報いになりました。もっと多くのものがわたしに与えられたら、それはひそかに保存しておきます。

3 「あなたは美しいので、わたしはわたしの花冠を贈りたいのです。わたしの持っているものの中で一番華やかな花冠を。白や赤の花ならたくさん知っています。それらは遠くのあの野原に咲いています。それらの花が見事に咲き、鳥が鳴くところで、わたしたちはそれらを二つとも摘みたいのです。」

4 わたしは以前より嬉しくはならないようでした。花はしきりに樹からわたしたちの居る草のところへ落ちてきました。ご覧なさい、わたしは嬉しくて笑わねばなりませんでした。わたしは夢の中でこんなに喜びいっぱいだったとき、夜が明け、わたしは目覚めねばなりませんでした。

5 あなたのおかげで、わたしはこの夏には、少女はみんな目をまっすぐに見なければなりません。一人を見つけると、わたしの苦悩はなくなります。あの一ひがこのダンスに加わっていれば、どうでしょう。貴いお方、どうかお願いですから、帽子を上げて下さい。ああ、あの一ひを花冠の下に見れるのなら。

(解説) 美しい恋人の素晴らしさを歌う。リズムは弱音で始まる 3a, 5b, 3a, 5b, 3c, 3d, 3d, 3c



である。

第1節では、詩人の誠の心が伝わるように祈りながら、美しい花、さらに宝石を頭にかざした愛しい彼女の素晴らしさが歌われる。

第2節では、詩人の捧げ物を受け取って、赤い薔薇の花のように恥じらい、お辞儀をしてくれる彼女の愛が讃えられる。この報いはいつまでも忘れないし、それ以上の物も大切にしたいと思う心境がよくわかる。

第3節では、美しい彼女には詩人は自分の持っているものの中で一番華やかな花冠を捧げたいと歌われる。白い花も、赤い花も、両方とも摘み取って、あなたに贈りたい、と歌う。

第4節では、夢のはかなさが歌われる。喜びがないと思っていたのに、花が足下へ散り、夢で幸せにあふれていた時、夜が明け目が覚めてしまう。

第5節では、彼女を見つけたい詩人の切なる思いが歌われる。彼女を捜し求め、すべての少女の眼をのぞき込み、一人が見つければ嬉しくなるのだが、帽子を上げてくれて、顔が見えなければ、どうにもならないのだ。

## 6. 女性の美しさ(L.53, 25)

1 見事な容姿の女性のあのお方、彼女がわたしに「ありがとうございます」と言って下さったら！その愛しいお方を称賛の歌で崇めます。わたしはすべての人に奉仕したいのですが、やはりこの方を選びました。他の人は自分の選んだ方のことをよく知っています。その方を称えなさい、わたしは怒りません。調べと言葉はわたしと一緒に結構です。わたしがここで称えれば、かれはあちらで称えればよいのです。

2 あの方の顔はとても美しく、わたしの天になろうとしているようです。そのほかには何に比べられるでしょうか。それは天の輝きをさえも持っています。そこからは二つの星が輝き出しています。わたしはその中に映りたいのです。わたしのすぐ近くにまで持ってきてほしいのです。そうすると奇蹟もきっと起こるでしょう。あの方がそうなれば、わたしは若くなり、恋に焦がれる病の身のわたしのこの憔悴の病も治るでしょう。

3 神はあの方の頬を入念に創造され、こんなに貴重な色を塗り、こんなに純粋な赤色、こんなに純粋な白色、こちらでは薔薇の赤色に、あちらでは百合の白色に塗られました。罪を恐れながら敢えて言いますが、わたしはいつも、あの方を見ている方が、天や天の車輪を見ているよりもいいのです。ああ、この愚か者のわたしは何を称えているのか。あの方を余りに高く持ち上げると、わたしの口の誉め言葉は直ぐにでもわたしの心の苦しみになります。

(解説) 恋人の美しさを讃える。リズムは、弱音で始まる 4a, 4b, 4a, 4b, 4c, 4d, 4c, 4d, 3e, 6e である。

第1節では、見事な容姿の女性が称えられる。感謝をしてけると称賛の歌を歌いたいのだ

が、誰でも自分の選んだ女性を称えるべきである。

第2節では、美しい顔の女性への恋が歌われる。天の輝きを持ち、二つの星が輝き出ている、近くへ来てくれると、奇蹟が起こって、わたしの恋病はすぐに治るほどの美しさである。

第3節では、頬の美しさが称えられる。薔薇の赤、百合の白が美しく、彼女を見ている方が、天や天の車輪よりもいいのだが、余り誉めすぎると、その誉め言葉が自分の苦しみになる。

#### 7. 夢の幸福(L.94, 11)

1 夏が来て、花が草の間に見事に咲いて、鳥が歌っていたとき、わたしは大きな草原へ行きました。そこには透明な泉が湧いていました。その水はナイチンゲールの歌っている森から流れてきていました。

2 泉のほとりに樹が一本立っていました。そこでわたしは夢を見ました。わたしは太陽から逃れて、愛しい菩提樹がわたしに冷たい影を与えてくれるように、泉へ来ていました。泉のほとりに坐り、悩みは忘れて、やがてわたしはそこで眠りました。

3 そこでわたしには、全世界がわたしに奉仕し、わたしの心が苦しみもなく天国にあり、身体はここで欲しいままにできるように思えました。するとわたしには苦しみはなくなりました。何が起ころうとも、神が支配しておられたなら、これ以上に良い夢は決してありませんでした。

4 わたしはそこでずっと眠っていたかっただけですが、呪われた鳥が鳴き始めました。どの鳥も、わたしの望み通りになればいいのですが、鳥はわたしから大きな喜びを奪いました。その叫びでわたしはびっくりしました。そこに石があったら、鳥の最後の時となったでしょうに。

5 とても年をとった女性がわたしにまた慰めを与えてくれました。彼女にわたしは誓いました。すると彼女はわたしに、その夢が何を意味するのかを説明してくれました。愛しい方々よ、聞いて下さい、 $2 + 1$ は3ですね。その他になお彼女はわたしに言いました、わたしの親指は指ですと。

(解説) 楽しい夏の夢もすぐに醒めてしまう。リズムは強音で始まる 4a, 4a, 3b, 3b, 3c, 3c, 4d, 4d, 4d である。

第1節では、花が咲き鳥が歌う美しい夏が描かれる。

第2節では、菩提樹の下で夢が見られる。

第3節では、心も体も喜びに溢れている様子が歌われる。

第4節では、その眠りも鳥の叫びで醒まされる。

第5節では、老婦人から慰めが与えられる。

#### 8. 菩提樹の下にて(L.39, 11)

1 「草原の菩提樹の下にわたしたちふたりの寝床がありました。そこに見えるでしょう、花

も草も二つとも美しく折られて敷かれているのが、森の前の谷間に、タンダラダイ、美しい声でナイチンゲールが歌いました。

2 わたしがその水辺に行きますと、そこにはわたしの愛しい人はもう来ていました。そこでわたしは、気高い婦人のように、迎えられましたので、わたしはいつまでも幸せです。あの人がわたしに口づけしたかですか、もちろん何回もですよ。タンダラダイ、ごらんなさい、わたしのこの口の赤いことを。

3 そこにあの人はこんなにきれいに花で寝床を作っていました。だれかがこの同じ道を通りかかると、後でもこれを心から笑うでしょう。バラの花を見るとまだ、タンダラダイ、わたしの頭がどこにあったかがわかるでしょう。

4 あの人がわたしのそばに寝ていたのがだれかに知れるようなことになると、(そんなことはありませんように)、わたしは恥ずかしく思うことでしょう。あの人がわたしとそこで何をしたかは、あのひととわたしとそして一羽の小鳥のほかは、だれも知ってはいけません。タンダラダイ、小鳥はきっと黙っていてくれるでしょう。」

(解説) 素朴で、生き生きとしていて、滑稽さもあるのに、優雅で、品位も、温かさも備えている心地よいリートである。中世にこれだけの詩が歌える詩人は他にはない。歌えば歌うほど心に迫る歌である。リズムは強音で始まる 4a, 4b, 4a, 4b, 4a, 4c, 2x, 4c である。

第1節では、草原の菩提樹の下での逢い引きの場所が示される。寝床が花と草を折って作られ、ナイチンゲールが美しい声で歌っている。花と鳥と人間の交響曲である。

第2節では、恋人が待っていて歓迎され、喜ぶ少女の姿が、描き出される。熱烈な恋である。

第3節では、寝床も作られていて、恋の営みの後の様子もわかる。通りかかる人はここで繰り広げられた男女の営みを思って、微笑むのである。

第4節では、男女の行為は秘密にする必要があることが説き明かされる。これを知っているのは、わたしとあの人とそして小鳥だけである。しかも小鳥はしゃべらない。

## 9. 声の遊び(L. 75, 25)

1 世界は黄、赤、青であり、森も他の場所も緑でした。小鳥が歌っていました。今ではしかしあの灰色鳥が鳴いています。世界は別の色をしているのでしょうか。そうです。世界は色褪せ、どこも灰色になってしまいました。だから、眉をひそめる人が多いのです。

2 わたしはかつて緑の丘に座っていました。そこには花や草がわたしと湖の間に若芽を出していました。あの眺めはそこにはもうありません。わたしたちがかつて花の冠りを作ったところには、今は霜と雪があります。これが小鳥たちを悲しませています。

3 愚か者たちは「雪よ降れ降れ」と言い、貧しい者たちは「ああああ悲しいこと」と言っています。だからわたしは鉛のように重くなっています。冬の心配事が三つあります。それやあ

れやが何であっても、夏がわたしたちの近くに来ると、私はそこからすぐに解放されるでしょう。

4 わたしはこんな風に長生きするよりは、蟹を生で食べる方がましです。夏よ、わたしたちをもう一度楽しくして下さい。あなたは野原と茂みを飾ります。わたしはその時には花で遊びます。わたしの心は太陽の高さまで昇るでしょう。この心を冬は藁の寝床の中へ追い込みます。

5 雌豚のようにわたしは怠け者になりました。わたしの真っ直ぐの髪も荒れ果てました。愛しい夏よ、あなたはどこに居るのですか。本当のところ、わたしは畑の手入れを見ていたのです。これ以上今のように罫に挟まれているよりは、ドブリルーの修道僧になる方がましです。  
(解説) 色彩豊かな夏が去り、灰色の冬が来ていて、気分がふさいでいる。寒い冬が去り、快適な夏の来るのが待たれる。鳥の音が響く。リズムは、弱音で始まり、4強音で、脚韻aはすべて同じ強音である。

第1節では、色褪せて灰色になった冬の世界が嘆かれています。黄、赤、青、緑でおおわれていた夏の世界が消え去り、小鳥も鳴かなくなった。寒さの厳しい冬が来て、世界は灰色になり、人々にも元気がない。

第2節では、楽しかった夏の日々が思い出されている。緑の丘に座り、花や草が萌え出でて、湖の眺めも素晴らしかった。花の冠を作ったところも霜と雪で真っ白である。小鳥たちももう鳴かない。

第3節では、冬の憂いが嘆かれる。雪を楽しむ愚か者もいるが、貧しい者は苦しんでいる。心は重く、憂いがいっぱいである。夏が来れば、それらの憂いはすべて吹っ飛んでしまうのに。

第4節では、楽しい夏の到来が願われている。夏が来て、野原や茂みが美しく飾られたら、花を摘んで遊べるのに。冬が藁の寝床に追い込んだ私の気持ちは高ぶって、天にまで昇るのに。

第5節では、夏が恋しい気持ちが叫ばれる。すべてのものが怠けているので、もう我慢ができない。修道僧になった方がましなくらいに気分が重い。寒い国では夏と冬の差が激しく、冬が来ると、夏が恋しい。喜びへの期待が十分に歌い込まれている。

#### 10. 不機嫌(L.110, 27)

1 だれが正しく歌えるというのですか。これは悲しい、あれは嬉しいと。だれがこれをまとめられるのですか。これはそう、あれはそうと。かれらはわたしを感かせ、とてもぐずぐずとしています。彼等の望みが分かると、わたしは歌うのですが。

2 喜びも悲しみもわたしは体験しました。だから彼等の望み通りに歌います。わたしは嬉しいです、わたしは悲しいです。夏の喜びはわたしを元気にしてくれます。わたしを苦しめるのは、わたしが恋人とどうなるのかという疑念です。

3 君たち小鳥たちに幸いあれ。君たちのすばらしい歌はわたしの歌を越えています。全世界

がそれを君たちに感謝しています。ありがとう。

(解説) 相手があるので、喜びや悲しみをはっきりと歌うのは難しい。リズムは、強音で始まる 4a, 4b, 4a, 4b, 3c, 3c, 5c である。

第1節では、悲しいとか、嬉しいとか決めて歌うことの難しさが述べられる。みんなの望み通りに歌えば、いいのだが。

第2節では、喜びも悲しみも体験しているので、望み通りに歌えることが述べられるが、自分と恋人のことが分からない苦しみが告げられる。

第3節は中断しているが、感謝の歌である。鳥たちの美しい歌こそ最高である。

## おわりに

ヴァルターのミンネリートは素朴であるが、そこには真実が漲っている。これだけあからさまでしかも意味深い恋の歌を歌える詩人はあるだろうか。愛し合う男女の気持ちは、中世でも現在でも全く変わらない。愛し愛される人間の思いはいつも同じであり、世の中がいかに変わろうとも、この男女間の真実の思いは変わらない。

最後にここで検討を重ねてきた10編のリートを振り返りながら、ヴァルターの恋愛観を探り出してみよう。

「少女の歌」はヴァルターの第2回目の放浪時代に創作されたもので、1205年以後にできたものが多く、ここにはとくに素晴らしくて有名なリートが集まっている。愛の喜びが称えられ、愛を担う少女の美しさと誠実さが歌われ、心からの自然の響きが流れて、ここに詩人の珠玉の愛が結集されている。これらのリートには、優雅さ、愛らしさ、誠実さが漲り、人間の愛の諸相が意味深く展開される。

女性に必要なものは、愛らしさ、美しさ、気品の高さ、純粹さ、慈愛の深さ、微笑みであり、さらに、富と美よりは誠と不変が大切である。愛は心を豊かに和やかにするものであり、しかもこの愛は相思相愛でなければならない。また男女相互の信頼が求められ、美しい恋人の幸せが祈られる。容姿の美しさが称えられ、夢の中にも美しい恋人が現れてくる。とくに有名な「菩提樹の下にて」は、男女の愛の幸福と共存共生の思い出に満ち溢れており、そこから男女の営みの美しさが伝わってくる。歌は望み通りに歌うことで、人間の喜びや悲しみがしみじみと伝わるのである。

ゲーテが「西東詩集」において、常に自らの愛の人生を探求し、若い頃からの思いを集約したように、ヴァルターはこの「少女の歌」において、自らの恋愛観を発展させ、新しい真実の愛のあり方を追求している。中世と現代との800年、ゲーテとヴァルターの間の600年、という時代の差を考慮しても、その愛の真実においては、大きな相違はない。男が女を愛するとき、

その真実さ誠実さが深いほど、その気高さが心に鋭く迫ってくる。中世の宮廷社会においてヴァルターが、身分と形式に縛られた偽りの愛を捨て、人間性に溢れた真実の愛を求めて苦しむとき、近代の市民社会においてゲーテは、男女の奥底にある究極の愛を見つめて行動する。それらの愛は喜びと苦しみに満ちて、愛し合う二つの心を高めていく。これは現代でも全く変わらない。「愛し合って互いを元気づけるのは、楽園の最高の幸福であろう」というゲーテの言葉は、強く心に残るものである<sup>3)</sup>。

ところで、日本における男女の愛の姿は、これらのドイツの愛の諸相とは全く違った展開を見せる。日独の男女の愛を単純に比較するのは危険であるが、人間としての最後の決断は普遍性を持ち、人間性に訴えてくる。先日文楽で「平家女護島」と「心中宵庚申」を鑑賞する機会に恵まれた。ここに見られる死に至る愛は、日独の差を如実に示す。おごる平家を滅ぼそうとした鹿ヶ谷の陰謀が露頭して、鬼界が島に流された俊寛僧都と、都に残されたその妻あづまの決断、妻は自害し、夫は島に残ることになる。また、八百屋半兵衛とその女房お千代の心中の決断は、日本的であり、ドイツの文化には見られない。「トリスタンとイゾルデ」の結末は、偽りの知らせによりもたらされ、相互の意志疎通もなく、悲劇的である。個人で真剣に生きる西洋の愛は、社会のしがらみに囚われて生きる日本の愛と根本的に異質である。ここではその文化と人間の違いが決定的な要因となる。しかし人間性という観点からこれを見つめるとき、そこに内在する普遍性こそ文学研究の究極の課題ではないだろうか。

人間同士の結合組織を重視する日本の社会で展開される愛は、個人と個人との人間関係が重視されるドイツの社会での愛とは、必然的に違うものである。男女がいかに愛し合っても、日本の社会の掟に反するものであれば、その成就是困難である。社会の構成が個人によって規定されているドイツでは、個人同士の人間的な愛が謳歌される。人間が生きる世界の差が、その愛の行動にも大きな影響を与えている。地域を越えた国際的な人間関係が増大している現在、言語と文化の壁を越えて、普遍的な人間性が求められ、これが今後の男女の愛の姿にも変化をもたらすだろう。ここでは、社会よりも人間が中心となり、またここで人間の愛の幸福が追求される。男女の愛が、個人の間だけではなく、周りの世界を暖める愛となるとき、その幸福は大きなものとなる。

ドイツの言語と文学の研究と教育に携わって既に半世紀を過ごし、その対象も現代、近代、中世に渡り、カロッサ、ゲーテ、ハルトマン、ヴァルターへと詩人の遍歴を重ねてきたが、それぞれの時代、それぞれの詩人の喜びと悲しみがつぶさに伝わってきて、思いは尽きない。時代の渦の中で生きることと愛することの激しさが、詩人の言葉の隅々に溢れていて、共感し涙することが多い。喜びに感激し、苦しみに打ち勝って、愛と生を生き抜いてきた詩人の人生は、現代に生きる我々に多くの教訓を残している。

医者で詩人のカロッサは、第2次大戦の最中、ミュンヘン郊外の美しい町パート・テルツに

住んで、医者として心から患者に接する傍ら、人間性に溢れる詩作に専念した。

愛と生を詩に託したゲーテは、神の存在に近いもの、永遠であって女性的なるものへと惹かれつつ、一刻一刻の思いを詩に昇華して、たくましく愛し生きそして歌った。

中世の中層の詩人ハルトマンは、宗教的な教養と宮廷的なマナーを身につけて、美しい中世高地ドイツ語でドイツの騎士精神を歌った。

中世のミネザングの巨匠であり、格言詩歌も歌った詩人ヴァルターは、男女の愛の心を見つめ、世界で起こる現象を直視して、伝統を時代に生かす精神で歌い上げた。

これらの詩人の人生を、自分自身の人生と重ね合わせるとき、若い頃から老年まで齢を積み重ねながら、常に人間性に貫かれて歌い続けた詩人の精神の躍動が、激しい感動を呼ぶ。その悲喜こもごもの長い人生を追体験しながら、私自身も、恩師や友人の指導と協力に支えられて、研究者・教育者としての半世紀を生き抜いてきたのだが、現代は中世とは違って、時代の移り変わりも激しく、時代と共に生きることの難しさを痛感している<sup>4)</sup>。

ゲーテの詩を読みそして歌って感激した青年の私は、「中世に帰れ」、「ゲーテに戻れ」を合言葉に、ハルトマンやヴァルター、さらにゲーテの詩を歌い続けて、50数年の歳月を歩んできたのである。そして中世のヴァルターの詩の詳細な検討を終えた今、両詩人の思考と人生が、この私の人生にさらに花を添えてくれたことを感謝している。ヨーロッパの伝統を受け継いだヴァルターの詩の研究は、わたしのゲーテ文学の研究をさらに深めてくれた。最後に両詩人の5月の歌を比較検討して、両詩人の感動を追体験し、この一連のヴァルター研究のまとめとしたい。

ドイツの5月の素晴らしさは言葉では言い尽くせない。これまで5月の初めにヨーロッパの大学で講演したことが多いが、講演会場の窓の外に広がる快晴の空も、窓を伝う五月雨の滴も、5月の美しさを伝えて、講演を聞く聴衆の思いに、そしてまた、討論に答えるわたしの心に深く沁み込んだ。長く寒い冬を耐え忍んだ花も葉も蘇生する5月はまさに感激の泉である。

ヴァルターの「五月の歌」Mailed (L.51, 13) (1198-1203)では次のように歌われる。5月になると人々は元気になり、楽しくなり、踊り、笑い、歌う。5月はすべてを和やかにし、森と草原を飾り、野原を色鮮やかに飾る。しかし愛する彼女が私の喜びを妨げているので、この苦しみの束縛から私を解放し、この季節を楽しいものにして欲しい。世の中のすべてが喜んでいいるのだから、私にも喜びを贈って欲しいと、彼女に願いたい。

ゲーテの「五月の歌」Mailed (Straßburg 1771)では次のように歌われる。自然は輝き、太陽は輝き、野原は笑う。花が咲き、歌声がみなぎる。喜びが溢れ、愛が満ちる。生き生きとした野原や、花に煙る豊かな世界が祝福される。少女は目を輝かせて私を愛し、ひばりは歌と空を愛し、朝の花は空の香りを愛する。私は若い血をたぎらせて少女を愛し、少女は私に青春と歓喜と勇気を与えてくれる。私は新しい歌を歌って、踊りに行きたい。私を愛してくれる少女

が永遠に幸福であって欲しい。

両詩人の間には、中世から近代への600年の時間の差はあっても、5月に寄せる大きな喜びは変わらない。中世の伝統的な愛は一方的であり、詩人ヴァルターの苦悩は大きい。近代の愛は相思相愛で、ゲーテの愛の幸せが胸を打つ。愛は苦悩であり、歓喜である。寒い冬の苦悩は、暖かい春には消える。5月はすべてが歓喜する季節であり、喜びといたわりの愛が漲る時期である。

ウィーンとチューリングゲンを往来して歌ったヴァルターも、フランクフルトとヴァイマルを往来して歌ったゲーテも、5月が来ると歓喜して、自然へのそして人間へのひたすらな愛を歌い上げた。ドイツ語の調べの隅々から伝わってくる両詩人の感激は、歌と共に新たに甦ってくる。人生の生き甲斐はまさにここに漲っているのである。

## 注

- 1) 赤井憲爾著「ドイツ文学における愛と生」関西外国語大学研究論集63号(1996)の355-369ページ、および「ヴァルター研究」同論集64, 65, 68, 69, 71の各号(1997-1999)それぞれの231-246, 185-198, 201-218, 200-215, 121-135の各ページを参照。
- 2) 村尾喜夫訳注「ワルターの歌」(1989 東京)の2-15ページを参照。なお本稿の散文訳もこの村尾訳に負うところが多い。
- 3) Goethes Werke, Herausgegeben von Erich Trunz. München 1972, Band 2, S.63.
- 4) 長年に渡る中世ドイツ文学の研究に一つのまとめをつける今、大阪大学やミュンヘン大学の恩師、内山先生、田中先生、片山先生、フロム先生、友人の山戸君、中村君、フーバー君、フォーグル君、ブレイカーさん、ヴィテンゼさん、さらに家族や親戚や弟子たちが、挫折しがちな私をいつも力づけてくれた。20年前から続けてきたドイツ講演の旅も、ひとまず終えることとして、その成果もこれらの人々の援助なしには考えられなかった。人情の厚さ、心使いの貴さは、私にとって身に余る光栄である。感謝の気持ちに支えられて、残されたこれからの人生を誠実に生きていきたい。